

下肢静脈瘤のラジオ波治療 始めました！

ラジオ波治療って何？ レーザー治療なら聞いたことあるけど・・・。

そもそも下肢静脈瘤ってどんな病気？

下肢静脈瘤とは、足の静脈がぼこぼこ膨らんで、皮膚表面に浮き出てくる病気です。

症状としては、ぼこぼこした静脈以外にも、足の痛み、重だるさ、むくみや 下腿の皮膚の色素沈着、かゆみ、夜間のこむらがえりなど、静脈の鬱滞によって起こる症状もあります。

これらも静脈瘤の治療により軽快が期待できます。

では、下肢の静脈瘤はなぜ起きるのでしょうか。

これは、表在静脈（大伏在静脈・小伏在静脈）から、心臓へ血液を送り返す深部静脈（大腿静脈・膝窩静脈）に流れ込むところにある逆流防止弁が、妊娠・出産、長時間の立ち仕事などにより破壊されることによって発生します。

逆流防止弁が壊れると、表在静脈から重力に逆らって血液を心臓に送り返すことができなくなり、下方に血液が貯まってしまいます。これにより静脈の内圧が高まって、静脈の拡張蛇行が起き、ぼこぼこした静脈瘤となり、さらに静脈うっ滞による症状が出現します。

静脈瘤の診断は？

視触診により、静脈瘤の分布・程度、皮膚の変化をみてから、超音波（エコー）検査で確定診断をします。

静脈の太さや、逆流の有無や程度が、体表から全く痛くない検査で診断できます。

最近当院では、3D-CT 検査を行い、静脈瘤の状態を視覚的にとらえて、治療方針の選定や患者さんへの説明に利用しています。

治療法は？

外科的治療以外では弾性ストッキングの着用が一般的で、症状はある程度は取れますが、根本治療ではありません。

外科的治療は、静脈瘤の原因になっている、逆流が起きている表在静脈の処理が必要です。

今までは、表在静脈（大伏在静脈・小伏在静脈）を外科的に抜去するストリッピング法や静脈内に硬化剤を注入して静脈を閉塞させる硬化療法などが一般的でした。

レーザー治療とは？

ここ数年、テレビでも取り上げられ、女優の松岡きっこさんが治療をうけて話題になっている治療が、レーザー治療です。

レーザー治療は静脈内にレーザーが照射できるカテーテルを挿入し、血管内から静脈をレーザーで焼灼し、静脈を閉塞させる方法です。2011年から、レーザー治療用機器が保険適応されてから、都市部の静脈瘤専門クリニックの日帰り手術が行われるようになり、都市部では急速に普及しています。

長野県内では5~6施設しか導入されていませんでした。

2014年になり、レーザー治療用機器の第2世代と、高周波（ラジオ波）治療の機器が新たに保険適応になりました。何れも血管内焼灼術による静脈閉塞により、逆流している表在静脈を処理する方法で、従来行われていた方法に比べて低侵襲であるといわれています。

なぜ、ラジオ波治療なのか。

ラジオ波治療は日本では 2014 年によく保険適応になった治療法ですが、米国では血管内治療の約 4 割を占めるほど、一般的な治療法です。熱を発生させる高周波カテーテルを静脈内に挿入し、先端に近い部分を 120 度に加熱し静脈を閉塞させる方法です。温度が正確に制御され、長さ 7cm が一気に焼けるため、レーザー治療のほぼ半分の時間ですみ、日本で普及している 980nm のレーザー治療より痛みや皮下出血の合併症が少ないなどの利点があり、今後日本でも、レーザー治療よりも普及する可能性が高い方法です。当院がラジオ波治療機器は長野県内では導入が 1-2 番で、南信地域ではレーザー治療機器を含め静脈瘤の血管内治療機器として 1 番最初の導入施設となります。

レーザーやラジオ波治療だけで、静脈瘤は消えるの？

血管内治療だけで約 4 割の静脈瘤はいずれ消えてなくなると言われていますが、手術直後には残っています。目立つ静脈瘤に対しては、2-3mm の小切開で静脈瘤の切除 (stab avulsion) を追加すると、手術直後からぼこぼこした血管からは、さよならできます。傷口もほとんど目立たず、女性ならスカートもはけるようになります。ただし、色素沈着は徐々に薄くなっていきますが、完全になくなるには 1 年以上かかります。ラジオ波治療だけでも静脈瘤は 3-4 か月すると、ほとんど目立たなくなりますので、血液サラサラ系の薬を飲んでいて方には出血のリスクがありますので、stab avulsion は追加しません。

なぜ、日帰り手術じゃなくて、入院しなくちゃいけないの？

当院では、ラジオ波治療をするにあたり、日帰り手術ではなく、手術当日の朝入院していただき、ラジオ波治療と stab avulsion を受け、翌朝エコー検査でチェックをして午前中に退院という 1 泊 2 日で行っています。(希望により 2 泊 3 日コースもあります。)

静脈瘤専門クリニックでは、手術当日来院し、手術を受けて 1-2 時間経過観察後帰宅。翌日、エコー検査のために来院し、検査後帰宅というシステムで行っていることが多いので、地方の患者さんはどうしても、クリニックの近くで 1 泊が必要です。

当院では、手術時の麻酔も局所麻酔と静脈麻酔による全身麻酔の併用で、痛みのない手術を行い、手術後も安心して過ごせるように 1 晩は入院して、経過を観察させていただいています。

翌日なら、自動車を運転しても帰れますので、交通機関が十分でない地方の患者さんには却って好都合かと思えます。

最後に、なぜ静脈瘤の治療をお勧めするのか？

下肢の静脈瘤は、昔から血管外科領域では一般的な疾患でした。

以前の治療法は広範囲のストリッピング治療が主体で、1 週間ほどの入院加療が必要でした。

生命に関わる疾患ではないので、私も積極的に手術治療は勧めず、弾性ストッキング療法で経過をみていることが多かったのですが、ここ数年、小範囲ストリッピングと stab avulsion という低侵襲治療を始めてみると、簡単に治るのなら治療を受けたいという患者さんが多く、決心して治療を受けてみると、ぼこぼこした血管がなくなったことも嬉しいが、足が軽くなったとか、こむら返りがなくなったことが更に良かったと感謝されています。ラジオ波治療は更に低侵襲な治療法で、術直後の痛みも少ない治療法ですので、静脈瘤のある患者さんは是非一度ご相談ください。